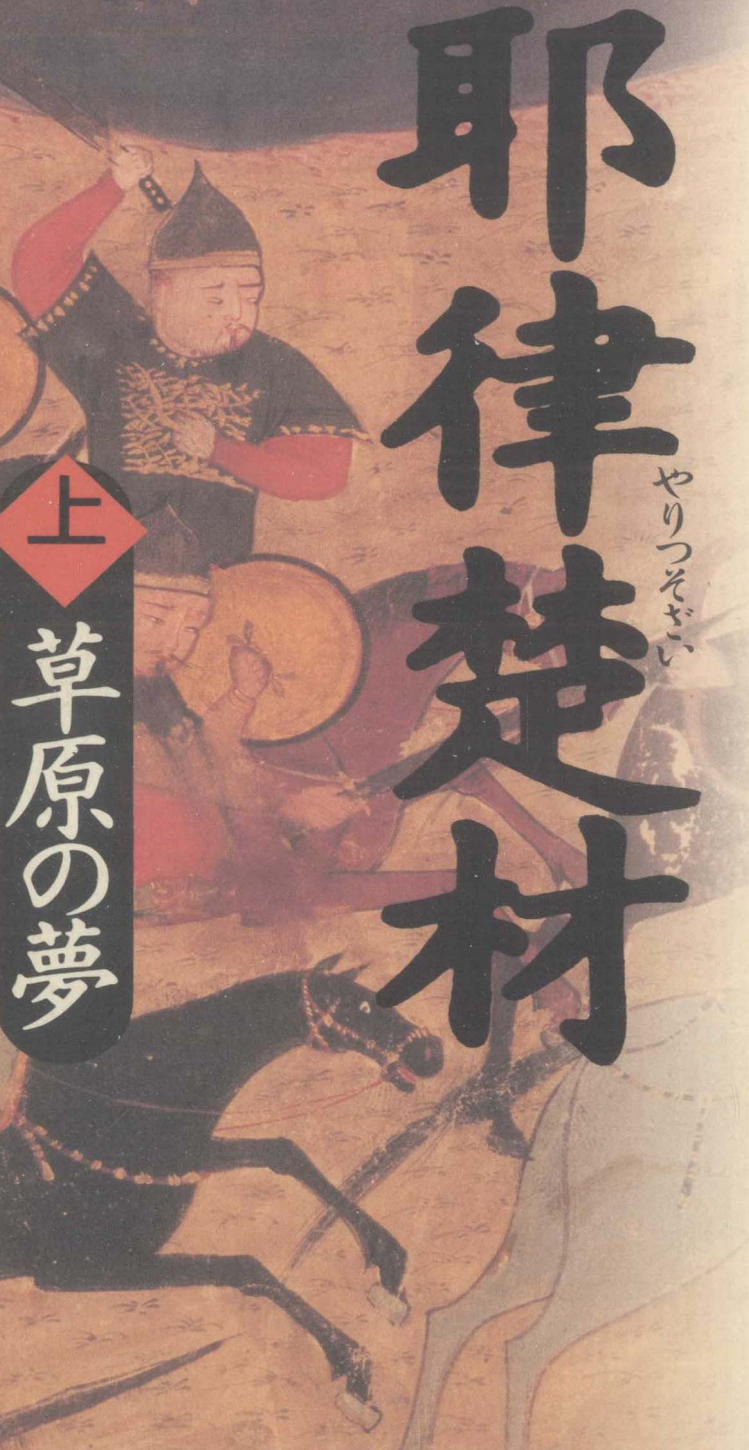


# 陳舜臣

chin shun shin

# 耶律楚材

やりつそざい

## 上 草原の夢

# 耶律楚材（やりつそざい）

上

草原の夢

陳舜臣
chin shun shin

集英社

耶律楚材㊤草原の夢

一九九四年五月二五日　第一刷発行
一九九四年九月三〇日　第九刷発行

著者　陳舜臣

発行者　若菜正

発行所　株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一―五〇
編集部（〇三）三二三〇―六一〇〇
販売部（〇三）三二三〇　六三九三
制作部（〇三）三二三〇―六〇八〇

印刷所　凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©1994　CHIN SHUN SHIN, Printed in Japan
ISBN4-08-774069-2 C0093

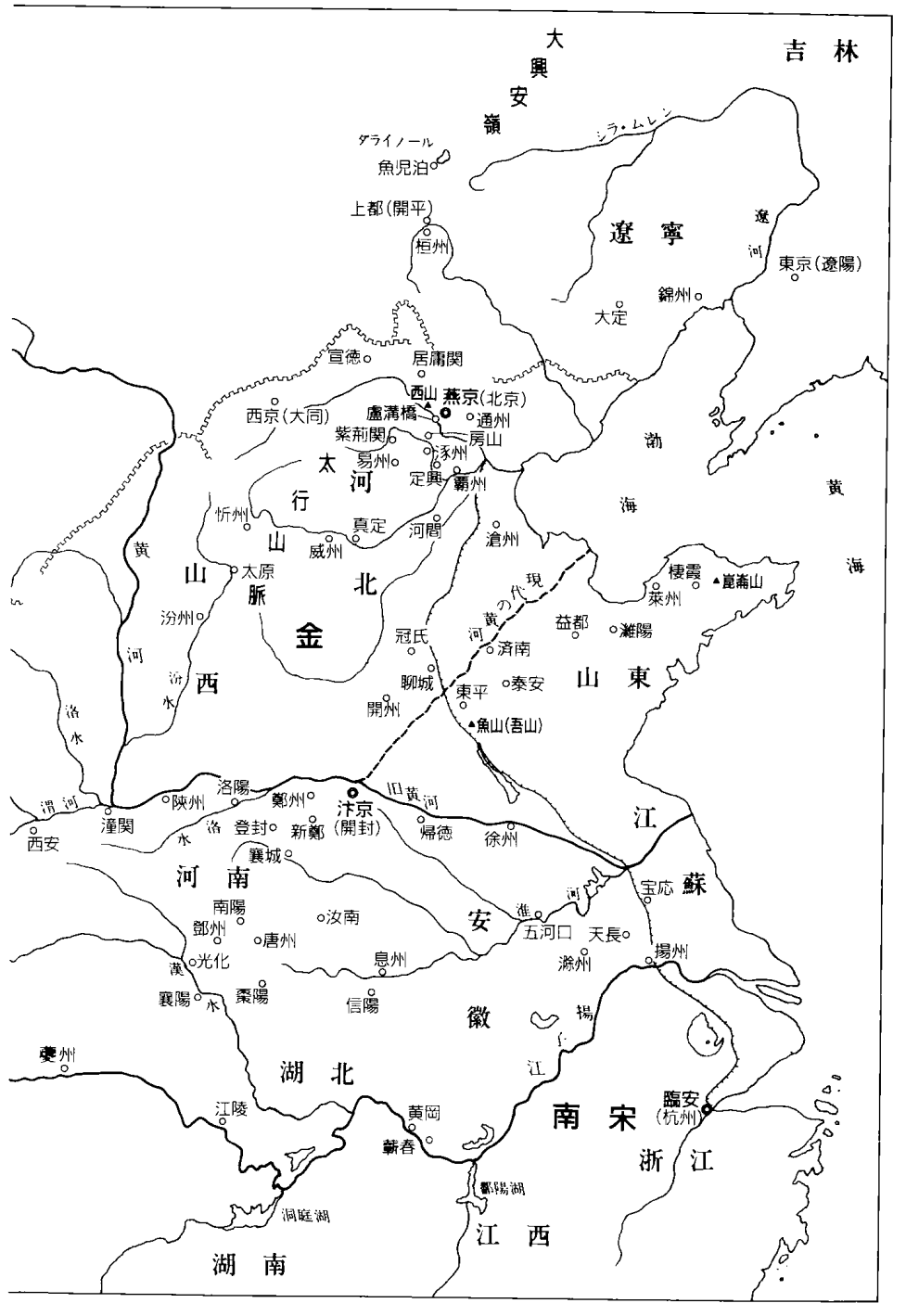
# 目　次

耶律楚材　㊤草原の夢

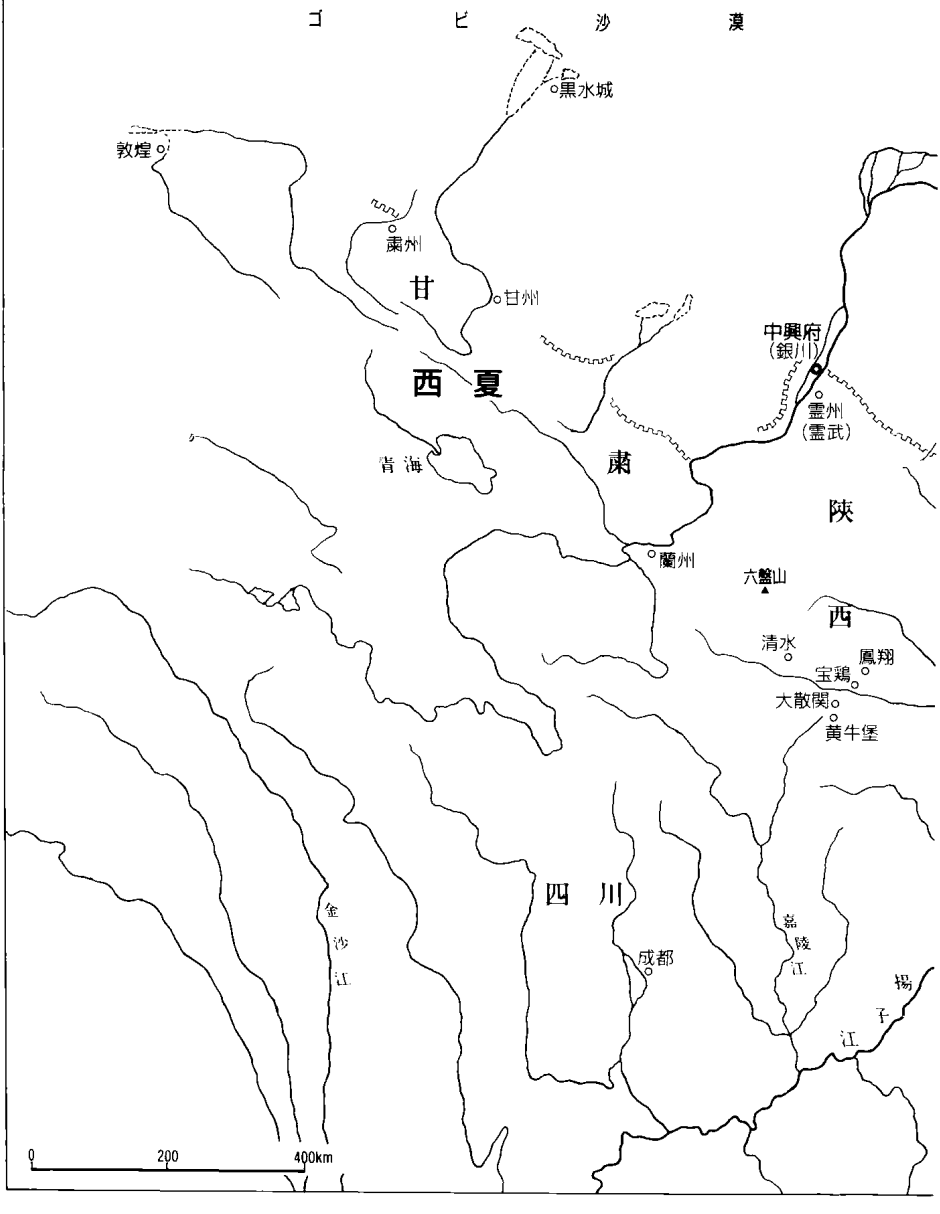
楚材誕生 9
蹄の音 34
究薬堂の客 60
胡沙虎(こさこ)の乱 81
同楽園漁藻池(どうらくえんぎょそうち) 91
南遷(なんせん)前後 110
絶粒六十日 128

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

覇者西遷　143
落日飛鴻（ひこう）　163
ウルツサハリ　181
征途遥かなり　201
滄海横流（そうかいおうりゅう）　222
ホラズム蹂躙（じゅうりん）　242
断蓬（だんぽう）　259


大興安嶺
吉林
シラ・ムレン
ダライノール
魚児泊
上都(開平)
桓州
遼寧
遼河
東京(遼陽)
錦州
大定
宣德
居庸関
西山
燕京(北京)
西京(大同)
盧溝橋
通州
紫荊関
房山
易州
涿州
太河
定興
霸州
渤海
黄海
忻州
真定
河間
行山
威州
滄州
黄山
太原
北脈
棲霞
萊州
崑崙山
汾州
金
冠氏
益都
濰陽
黄河の現代
済南
聊城
泰安
山東
西
開州
東平
魚山(吾山)
洛水
洛陽
鄭州
汴京
旧黄河
陝州
渭河
潼関
登封
新鄭
(開封)
帰徳
徐州
西安
襄城
河南
宝応
蘇
南陽
汝南
安
淮河
五河口
天長
鄧州
唐州
滁州
揚州
光化
漢水
息州
襄陽
棗陽
信陽
徽
揚子江
湖北
夔州
江陵
黄岡
蘄春
臨安
(杭州)
南宋
浙江
鄱陽湖
洞庭湖
江西
湖南

# 13世紀前半の中国


ゴビ沙漠
黒水城
敦煌
粛州
甘
甘州
西夏
中興府
(銀川)
霊州
(霊武)
青海
粛
陝
蘭州
六盤山
西
清水
鳳翔
宝鶏
大散関
黄牛堡
四川
金沙江
成都
嘉陵江
揚子江
0
200
400km

装幀　菊地信義

カバー写真　パリ国立図書館所蔵
「集史」〝モンゴル兵の攻撃〟部分

# 耶律楚材（やりつそざい）

## ㊤ 草原（そうげん）の夢（ゆめ）

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 楚材誕生

## 1

耶律履は、筆にたっぷり墨を含ませて、赤い紙に、
――楚材
の二字をしるし、産褥の妻にみせた。
生まれたばかりの赤児の名である。
「木がありますのね」
と、妻の楊氏は夫の顔をみつめながらたずねた。呟くような声であった。
「木があるんだ、ふとい木が」
妻のほうにむけた紙を、のぞきこむようにして、耶律履は答えた。
「そうね、ふといわね。でも、これでいいのかしら？」
楊氏はそう言って目をとじた。

「材」の字の「木」の部分が、そういえばそこだけ濃いようにみえた。
「わしも六十だ。……」
耶律履はぽつんと言った。あとしばらく、二人は口をひらかなかった。
夫婦間のやりとりは、熟知の部分が多すぎて、それを省略するので、部外の人にはわかりにくい。だが、二人は心の奥深いところで理解し合っているので、このていどの会話でさえ、ことばが多すぎるのだ。ほとんど確認のための作業といってよい。
金王朝の重臣である耶律履には、何人かの妻がいた。当時ではそれがとうぜんとされていたのである。彼が最初に娶った蕭氏には子はなかったが、つぎに迎えた郭氏とのあいだには二人の子がいた。いま生まれて、「楚材」と名づけられた赤児の異母兄にあたる。二人の名は「弁才」と「善才」であった。
才と材とは、発音はおなじだが、字形は異なる。郭氏の子とちがった字をえらんだのは、耶律履の楊氏にたいする一種の思いやりとうけとめる人がいた。　―だが、そうではなかったのである。

金王朝は女真族の政権であった。女真族は中国の東北（満洲）に住んでいたトゥングース系の民族である。のちに清王朝を建てた満洲族も、じつは女真族にほかならない。彼らははじめ契丹族の政権である遼王朝に服属していた。
契丹族は東部蒙古のシラ・ムレン流域で遊牧していたモンゴル系の住民である。唐王朝の支配

下にあったが、唐がほろんだあと、耶律阿保機（在位九一六―九二六）という首長があらわれ、独立政権を樹立した。これが遼である。その支配圏は、現在の北京を含む燕雲十六州に及んでいた。

唐につづく中国正統政権と自負する北宋にとって、そこは回復すべき失地だった。燕雲十六州の回復は、北宋の国家としての至上目標だったのである。北宋は遼とのあいだに、「澶淵の盟」という和平条約を結んでいたが、機会があれば、遼の燕雲十六州を奪回しようとしていた。

その機会が訪れた。契丹族の「遼」の後方に、女真族が擡頭してきたのである。北宋はこの金と名乗る女真族政権と結び、契丹族の遼を挟撃することにした。

燕雲十六州の中心都市である燕京（北京）はこうして陥ち、遼王朝はほろびた。だが、燕京を陥したのは二国同盟軍ではなく、女真族の金軍だけであった。北宋は内乱もあって、燕京を攻める力がなかったのである。金はとうぜんのように燕京を占領し、その奪回を望む北宋との関係が緊張するようになった。

北宋と金とは戦闘状態となり、金はついに北宋の首都汴京（開封）を陥した。北宋の靖康元年（一一二六）のことである。北宋の皇帝の欽宗と先帝の徽宗とは北地に連行され、皇族の一人が逃れて、杭州で政権を樹てた。これが南宋と称される王朝である。

金ははからずも中国の北半分を支配することになったが、これまでおもに狩猟生活を送っていた女真人には、行政の人材はほとんどいなかった。そこで金は、いましがたほろぼした遼王朝の人材を採用することにした。

耶律履は遼の皇室出身の人である。もちろん契丹人なのだ。

契丹人耶律履は、自分たちをほろぼした女真族の金王朝に重臣として仕えたのである。その子の楚材が生まれたのは、金の明昌元年（一一九〇）のことであった。遼の天祚帝が燕京を放棄して陰山に逃れ、契丹王朝が事実上滅亡したのが保大二年（一一二二）だから、それからすでに六十八年たっている。耶律履自身も、遼の滅亡後に生まれたのだ。

契丹政権の滅亡は耶律楚材の祖父耶律聿魯の若いころのことだった。

楚材は金の民となった契丹人の三世ということになる。しかも、父の耶律履は金の宰相なのだ。楚材は金に忠誠を尽すことを、誰よりも明確にしなければならない立場の人間になるはずだった。

でも、これでいいのかしら？

と、彼の母は産褥で呟いた。

生まれた赤児に楚材という名をつけた夫の気持を、彼女はよく知っていた。六十になった夫は、ひまさえあれば、若い妻の楊氏にいろんな話をした。耶律履は妻の大きな腹に手をあてて、

――私はこの子を教えることができないであろう。

と、言った。それは妻に自分のかわりにこの子を教育してほしい、ということにほかならない。

楊氏の父親は、身分は低いが、大学者として知られた漢族であった。男児が生まれなかったので、一人娘に学問を仕込み、彼女は稀代の女学者といわれるほどになった。だが、楊氏は縁遠かった。目鼻立ちの整った器量よしだったが、背が高すぎたからである。六尺三寸というから、一・九メートルを上回っていたことになる（宋尺の一尺は約三〇・七センチ）。耶律履はあえて

そんな巨女を妻に迎えた。

健康な子をうみ、教育をするのに、彼女以上にふさわしい女はいなかったのだ。

「楚材よ、どんな世の中になっても、坊やは楚材よ。……」

楊氏は赤児に頬ずりして言った。

耶律履は世の中が変わることを予感し、そのことを妻に語った。楊氏はそれを理解した。だが、彼女は自分の周囲をみても、世の中が変わるなどと思っている者を、一人も見出すことはできなかった。

楚材の生まれる前年、金の第五代皇帝世宗が死んだ。小堯舜（ぎょうしゅん）と呼ばれたほどの名君で、在位二十九年（一一六一―八九）のあいだに、隣国との平和を維持し、先帝（海陵王）の南伐で疲弊した国家財政を再建した人物である。だが、四年前に皇太子をなくしていたので、皇太孫の完顔璟（かんがえい）が第六代皇帝として即位した。これが章宗である。世宗の死は正月のはじめであり、金王朝は中国ふうにその年は改元せず「大定二十九年」として、翌年になって明昌と改元したのである。

新帝は二十二歳で即位し、祖父が安定させた国家を受けつぎ、聡明で好学の誉が高く、前途に不安があろうとはおもえなかった。

耶律履は国政の中枢にむかって昇進するにつれて、ひそかに不安を抱くようになった。

楚材が生まれた年、耶律履は参知政事から尚書右丞に昇進した。

――参知政事移剌履（いらり）を以て尚書右丞と為（な）す。

と、『金史』にみえる。元代に編纂された『金史』は、「耶律」という姓をよく「移剌」としている。もともと契丹語で、この部族の興った地名であり、それを漢字にあてるにさいして、表記法が異なることもある。後年、耶律楚材自身もよく移剌楚材と署名することがあった。

金制では、国政の中枢である尚書省には、左右の丞相と平章政事二名の四人の従一品官がいて「宰相」と呼ばれていた。その下に左右の丞があり、これは副首相に相当し、正二品官であるが、慣例として宰相と呼ばれることもあった。その下に従二品官の参知政事が二人いた。行政府の六部の閣僚は正三品官があてられた。

耶律履は国史院（歴史編纂所）編修官から翰林修撰を経て、礼部郎中（文部省局長）に任命され、いちど薊州刺史（長官）として地方に出たことがあるが、すぐに呼び戻され、章宗即位直後に礼部尚書（文相）となった。ついで参知政事に任命され、楚材が生まれたころ、尚書右丞に進んだ。

## 2

楚材、という名に、母親の楊氏がやや不安をかんじたのは、それが古典の、

——楚材晋用

に由来するからであった。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com